

マッリナータの〈正しい語形成〉論*

川村 悠人

1 問題の所在

注釈者マッリナータ (Mallinātha、15世紀頃) は、バツティ (Bhaṭṭi、6世紀後半–7世紀前半) の文法実例書 Bhaṭṭikāvya を構成する四部のうちの一つである定動詞の部 (tiñantakāṇḍa) の位置づけに関して、次のような説明を与える。

SP on BhK 14.1 (II.115.7–10): iha sauśabdyam nāma kāvyasobhākaro guṇaḥ | sa ca supām tiñam ca vyutpattiḥ sauśabdyam parikīrtitam iti dvidivha uktaḥ | tatra subantā vyutpādītāḥ | athedānīm tiñām lādeśatvāt tatrāpi leṣāś chāndasatvād anyān navalaḍādivilāsān navabhir uttaraiḥ sargair vyutpādayi-syann asmin sarge liḍvilāsam utpādayatīti |

我々の見解では、〈正しい語形成〉と呼ばれるものは美文に輝きをもたらす詩的美質である¹。そしてその〔〈正しい語形成〉〕は「名詞接辞で終わる複数項目と定動詞接辞で終わる複数項目の派生は〈正しい語形成〉と言われる」というように二種であることが〔詩学書 Pratāparudrayasobhūṣaṇa に〕述べられている。それらのうち、名詞接辞で終わる複数項目は既に派生された。さて次に、tiñ (定動詞接辞) は1音の代置要素であるから、〔また〕その〔1音〕のうちでも IET はヴェーダ語に属するものであるから、他の、九つの IAT 等で終わる項目の多様な顕現〔物〕(laḍādivilāsa) を九つの後続する章を通じて〔バツティは〕派生する²。そのために、この章で〔彼はまず〕IIT で終わる項目の多様な顕現を生み出す。

文 (vākya) を構成するのは、名詞接辞で終わる項目と定動詞接辞で終わる項目の二者である。詩論家ヴィディアーナータ (Vidyānātha、13世紀末–14世紀初頭) によれば、名詞接辞で終わる複数項目と定動詞接辞で終わる複数項目が文法規則に従って正しく派生しているとき、〈正しい語形成〉(sauśabdyā) と呼ばれる詩的美質 (guṇa) が成立する (PYBh [328.2]: supām tiñam³ ca vyutpattiḥ sauśabdyam parikīrtiyate)⁴。マッリナータの上記の説明は、彼がヴィディアーナータの定義から〈正しい語形成〉に名詞接辞で終わる項目に関わるものと定動詞接辞で終わる項目に関わるものの二種を読みとり、それらを Bhaṭṭikāvya の構成に当てはめていることを示す。本稿において、それらはそれぞれ〈名詞形の正しい語形成〉、〈定動詞形の正しい語形成〉と呼ばれる。マッリナータによれば、Bhaṭṭikāvya の文法学部門中、種々雑多な規則が不規則に例証される雑多の部 (prakīrṇakāṇḍa) と特定の文法規則群が順番に例証される主題の部 (adhikārakāṇḍa) には主として〈名詞形の正しい語形成〉が認められ、多様な定動詞形とその派生に関わる諸規則が扱われる定動詞の部には主として〈定動詞形の正しい語形成〉が認められる。

*Lidia Szczepanik-Wojtczak 博士より、本稿の諸点に関わる有益な助言と研究資料を頂戴した。ここに記して謝意を表する次第である。本研究は JSPS 科研費 15J06976 の助成を受けたものである。

¹ヴァーマナは詩的美質のこのような役割を明言する (KAS 3.1.1: kāvyasobhāyāḥ kartāro dharmā guṇāḥ)。ヴィディアーナータも詩的美質に関しては同じ立場をとる (PYBh [334.8]: kāvyasobhākaratvam eva guṇālañkārasvarūpam)。

²各1音で終わる項目の使用により、必然的に「定動詞接辞で終わる複数項目の派生」が得られる。なお、vilāsa という語の解釈については川村 2014a: 388, note 34 を見よ。

³テキストの読み tiñā は誤植であろう。

⁴sauśabdyā は bhāvapratyaya である taddhita 接辞ṣyañで終わる語である (A 5.1.124 guṇavacanabrāhmaṇādibhyaḥ karmaṇi ca)。

〈正しい語形成〉を文学的要素の一つとして提唱したのはヴィディアーナータが最初ではない。古くはカシミールの詩学者バーマハ（Bhāmaha, 7世紀頃）が、〈正しい語形成〉を美文の装飾（alaṅkārti）と見なす学者達の見解に論及している。バツティが活躍した時代、既に〈正しい語形成〉という概念が成立していた可能性は高い。

KA 1.13–15: rūpakādir alaṅkāras tasyānyair bahudhoditah |
 na kāntam api nirbhūṣaṁ vibhāti vanitāmukham ||
 rūpakādim alaṅkāraṁ bāhyam ācakṣate pare |
 supāṁ tināṁ ca vyutpattim vācāṁ vāñchanty alaṅkr̥tim ||
 tad etad āhuḥ sauśabdyam nārthavyutpattir īdr̥ṣī |
 śabdābhidheyālaṅkārabhedād iṣṭam dvayam tu naḥ ||

〈隠喩〉等はそれ（美文）の装飾であり⁵、他者達によって多様に生み出されてきた。女性の顔は、たとえ魅力的であっても、装飾がなければ輝くことはない。

〈隠喩〉等の装飾は「美文にとって」外的なものであると他者達は主張する。「彼らは、」名詞接辞で終わる複数項目と定動詞接辞で終わる複数項目の派生を、表現（美文）の装飾として求める⁶。そのようなこの「派生」を〈正しい語形成〉と「彼らは」言う。意味の派生（隠喩等）はこのようなもの（美文の装飾）ではない「と言う」。

しかし、〈言葉の装飾〉と〈意味の装飾〉には違いがあるから、我々はその2つ組を「美文の装飾として」認める。

だが、ここで疑問が起こる。もし文法的に正しい複数の名詞形や定動詞形が単に使用されるだけで〈正しい語形成〉が得られるのであれば、その場合、あらゆる作品に見境なくこの詩的装飾または詩的美質が認められることになってしまう。それ故、マツリナータが念頭に置く〈正しい語形成〉は、特定の条件下で認められるものと考えねばならない。本稿は、〈名詞形の正しい語形成〉と〈定動詞形の正しい語形成〉の成立条件を考察し、マツリナータが両者を Bhattikāvya に適用した論理を探ろうとするものである。

2 先行研究

2.1 Raghavan 1978

〈正しい語形成〉の概念と歴史については Raghavan 1978: 251.39–252; 369–370 が論じているが、上記問題に対する回答は与えられない。加えて、同研究書はマツリナータが〈正しい語形成〉に二種を認めている点への配慮を欠き、以下に見る詩人マーガ（Māgha, 8世紀後半）の詩節や同詩節に対するマツリナータの重要な言明にも言及しない。Raghavan 1978: 251.43–252.1 は、後代に詩的美質と見なされるに至った〈正しい語形成〉は古風で優雅な諸語（quaintly graceful words）または印象的で文法規則が派生を許す珍語（striking grammatical rarities）の使用から結果するものであると説明するが、肝心の根拠や例が挙げられておらず、その説明からは〈正しい語形成〉の具体的な姿が見えてこない。

⁵指示代名詞 tad は KA 1.11 で述べられた kāvya という語を受ける。

⁶ここで vāc という語が単に「言葉」（śabda）ではなく、言葉と意味からなる「表現（美文）」を指示するものとして使用されていることは文脈上明らかである。このことは Udyānavṛtti の説明からも支持される（UV on KA 1.15 [7.18–19]: na hi śabdāmātram vāk kiṁ tarhi ubhayaṁ śabdaś cārthaś ca | taṁ ca naḥ kāvyam）。バーマハは KA 1.3; 2.4; 2.96; 5.64; 5.69 でも vāc を「表現（美文）」を指示するものとして使用する。

2.2 Madhavan 2001

Madhavan 2001: 359.28–32 は〈正しい語形成〉に関して以下のように述べる。

The sauśabdyā or poetic elegance in general obtained by mere placement of words is evidently noticeable in the R̥gvedic mantras which on most occasions do not show any involvement of figures like Rūpaka, Upamā and othets. Vālimīki and Vyāsa have evinced this Sauśabdyā in many verses of the two great epics.

Madhavan 2001 は、〈正しい語形成〉は諸語の単なる配置 (mere placement of words) から得られるとする。しかし、もしそうならば、上述したように同美質はあらゆる作品に認められることになってしまうであろう。本稿が明らかにするように、少なくともマッリナータにとって、〈正しい語形成〉はそのような類いのものではない。

3 〈定動詞形の正しい語形成〉

まず、〈定動詞形の正しい語形成〉がどのような条件下で成立するかについて検討しよう。その手掛かりは、ŚV 1.51 とそれに対するマッリナータ注に見つかる。

3.1 ŚV 1.51 の分析

ŚV 1.51 は以下のような詩節である。

ŚV 1.51: purīm (1)avaskanda (2)lunīhi nandanam
(3)muṣāṇa ratnāni (4)harāmarāṅganāḥ |
vigṛhya (5)cakre namucidviṣā vaśī
ya ittham asvāsthyam ahardivam divaḥ ||

その支配者 (ラーヴァナ) はナムチの敵 (インドラ) と争って、都 (アマラーヴァティー) を強襲し、ナンダナ園を切り裂き、宝を奪い、天女達を連れ去った。このようにして、[ラーヴァナは] 日々天界を荒らした。

下線で示したように、当該詩節では五つの定動詞形が使用されている。それらのうち、(1) avaskanda (「強襲した」)、(2) lunīhi (「切り裂いた」)、(3) muṣāṇa (「奪った」)、(4) hara (「連れ去った」) は、いずれも動詞語基 skand、lū、muṣ、hr̥の後に命令法接辞 IOṬが導入され、それに hi が代置されて派生する語形である。当該の IOṬの導入と hi の代置は次の規則に基づく。

A 3.4.3: samuccaye 'nyatarasyām ||

「動詞語基の意味間に限定関係 (viśeṣaṇaviśeṣyabhāva) があるとき、積み重ねられる行為を表示する動詞語基の後に IOṬ接辞が任意に起こり、その IOṬに hi/sva が代置される。一方、ta/dhvam の領域においては hi/sva の代置は任意である」

一方、(5) cakre (「[荒ら] した」) という定動詞形は、(1)–(4) が表示する諸行為に共通する行為 (sāmānya) を表示するものとして使用されている。積み重ねられる諸行為 (samuccīyamānakriyā) に共通する行為を表示する動詞語基の追加使用 (anuprayoga) は、次の規則により制定される。

A 3.4.5: samuccaye sāmānyavacanasya ||

「行為の積み重ねがあり、動詞語基の意味間に限定関係がある場合に、積み重ねられる諸行為に共通する行為を表示する動詞語基が追加使用される」

定動詞形(1)–(4)が表示する諸行為は、(5) *cakre*が表示する行為と限定関係(*viśeṣaṇaviśeṣyabhāva*)を結んでいる⁷。前者の四行為が限定要素(*viśeṣaṇa*)、後者の行為が限定対象(*viśeṣya*)である。(5)が表示する、(天界を荒れた状態に)する行為は、(1)–(4)が表示する諸行為により限定され、特徴づけられている。(1)–(4)が表示する四行為をなすのは「ラーヴァナ」という同一の〈行為主体〉(*karṭr*)であり、その「ラーヴァナ」のもとに異なる四行為が積み重ねられる⁸。しかし、*hi*で終わる(1)–(4)の定動詞形からは当該の文脈に関わる特定の *kāraka*、時制(*kāla*)、人称(*puruṣa*)、数(*vacana*、*saṅkhyā*)は理解(*avagama*)されない。それらは追加使用される定動詞形 *cakre* (*kr* 3rd sg. perfect *Ā.*)から理解される⁹。文法家達の言い方では、(5)が、当該の文脈に関わる特定の *kāraka*、時制、人称、数を顕示(*abhivyaṅkti*)する¹⁰。より理解を明瞭にするために、*Kāśikāvṛtti*が挙げる例を見よう。

KV on A 3.4.5 (I.293.21–22): *odanaṃ bhukṣva saktūn piba dhānā svādety evāyam abhyavaharati* |

【例】粥を食べ(*bhukṣva*)、ひき割り大麦を飲み(*piba*)、穀物を味わう(*svāda*)。まさにこのような仕方での者は食事をしている(*abhyavaharati*)。

例文中で、*bhukṣva* (「食べる」)、*piba* (「飲む」)、*svāda* (「味わう」)は、A 3.4.3により動詞語基 *bhuj*、*pā*、*svad*の後に命令法接辞 *IoT*が導入され、それに *sva* (*bhukṣva*)と *hi* (*piba*、*svāda*)が代置されて派生する語である。A 3.4.5に基づき、上記三つの動詞語基が表示する行為に共通する食事行為を表示する動詞語基として、*hr* (*abhyavaharati*)が追加使用されている。定動詞形 *abhyavaharati*が当該の文脈が要求する特定の *kāraka*、時制、人称、数を顕示する。同様にして、*ŚV* 1.51では、(1)–(4)の四動詞語基が表示する強襲行為等(*avaskandanakriyādi*)に共通する、(天界を荒れた状態に)する行為を表示する動詞語基として *kr* (*cakre*)が追加使用されている。

A 3.4.3により、動詞語基に後続する *IoT*に *parasmaipada* 接辞 *hi/ta*が代置されるか *ātmanepada* 接辞 *sva/dhvam*が代置されるかは、当該の動詞語基が *parasmaipada*と *ātmanepada*のどちらの接辞

⁷A 3.2.3とA 3.4.5にはA 3.4.1: *dhātusambandhe pratyayāḥ*から *dhātusambandhe* (「動詞語基の意味間に限定関係があるとき」)が継起する。KV on A 3.4.1 (I.292.3): *dhātvarthe dhātuśabdāḥ | dhāvarthānām sambandho dhātusambandhaḥ viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaḥ* |

⁸A 3.4.3に述べられる *samuccaya*は、互いに異なる複数の行為が同じ行為者のもとに積み重ねられることを意味する。この点に、同じ一つの行為の反復(*paunaḥpunya*)または力強さ(*bhṛśatva*)を意味する *samabhihāra*との違いがある。PM on KV 3.4.3 (III.149.16–19): *anekāsāṃ kriyānām ekasmin sambandhini nicīyamānatety arthaḥ | etenaikakriyāviśayāt samabhihārāt samuccayasya bhedo darśitaḥ | dhātoḥ kriyāvācivitvāt kriyādharme samuccayamātre vṛttir na bhavātīty abhiprāyeṇāha—samuccīyamānakriyāvācanād iti | ekasmin sādhanē yāḥ kriyāḥ samuccīyante tadvācibhyo dhātubhyaḥ pratyaya ity arthaḥ |* (「*samuccaya*は、]多数の諸行為が同じ関係者[能成者]のもとに積み重ねられることを意味する。これによって、[A 3.4.2で規定される、]単一の行為を対象領域とする *samabhihāra*との、*samuccaya*の違いが示されている。動詞語基は行為を表示するから、[それが]行為の属性である『積み重ね』だけを表示することはない。このことを意図して[*Kāśikāvṛtti*は]述べる、『積み重ねられる行為を表示する[動詞語基の後に]』と。同じ能成者のもとに諸行為が積み重ねられるとき、その[諸行為]を表示する諸動詞語基の後に[*IoT*]接辞が起こる、という意味である」)なお、マッリナータはA 3.4.2: *kriyāsamabhihāre loṭ loṭo hisvau vā ca tadhvamohā*から *kriyāsamabhihāre*をA 3.4.3に読み込み、「特定の強襲行為等の積み重ねが、[ここでの] *kriyāsamabhihāra*である」(*avaskandādikriyāviśeṣānām samuccayaḥ kriyāsamabhihārah*)と説明するが(*Sarvaṅkaṣā* on *ŚV* 1.51 [20.23–27])、この説明はパーニニ文法学の伝統的解釈から支持されるものではない。

⁹SVO on *ŚV* 1.51 (30.9–10): *kālakārakavibhaktivacanaviśeṣāvagamaḥ tv anuprayogavaśāt* |

¹⁰SK 2828 (III.654.2): *tataḥ saṅkhyākālayoḥ puruṣaviśeṣārthasya cābhivyaṅktiḥ* | BM on SK 2828 (III.654.9): *hisvābhyām tu na saṅkhyākārakādyabhivyaṅktiḥ* |

をとる動詞語基かによって決まる (yathopagraham)。IOTに代置された hi には A 6.4.105: ato heḥ (「短音 a で終わる aṅga に後続する hi にゼロが代置される」) により適宜ゼロ (luK) が代置される。(1) avaskanda と (4) hara は、A 3.4.3 の適用後 (ava + skand + hi; hr̥ + hi)、A 3.1.68: kartari śap により vikaraṇa である ŚaP 接辞が動詞語基 skand と hr̥ の後に導入され (ava + skand + ŚaP + hi; hr̥ + ŚaP + hi)、ŚaP に後続する hi に A 6.4.105 によりゼロが代置された語形である (ava + skand + a + φ; hr̥ + a + φ → har + a + φ [A 7.3.84: sārvaḥātukārdhadhātukayoḥ; 1.1.51: ur aṅ raparah]). (3) muṣāṇa は、A 3.4.3 の適用後 (muṣ + hi)、A 3.1.81: kryādibhyaḥ śnā により vikaraṇa 接辞 Śnā が動詞語基 muṣ の後に起こり (muṣ + Śnā + hi)、A 3.1.83: halaḥ śnaḥ śānaj jhau により Śnā 全体に ŚānaC が代置され (muṣ + ŚānaC + hi)、ŚānaC に後続する hi に A 6.4.105 によりゼロが代置された語形である (muṣ + āna + φ)。(2) lunīhi は、同じく A 3.4.3 の適用後 (lu + hi)、A 3.1.81 により lū の後に Śnā 接辞が起こり (lu + Śnā + hi)、A 6.4.113: ī haly aghoḥ により Śnā の ā 音に ī 音が代置された語形である (lu + nī + hi)。lunīhi の場合には、hi は短音 a に後続していないので、A 6.4.105 は適用されない。

3.2 マッリナータの言明

マッリナータは ŚV 1.51 に〈正しい語形成〉を認める。

Sarvaṅkaṣā on ŚV 1.51 (20.28–30): atra tinvaicitryāt sauśabdākhyo guṇaḥ | supāṁ tinām parāvṛtṭih sauśabdam iti lakṣaṇāt |

当該〔詩節〕には、定動詞接辞で終わる項目の多様性ゆえに、〈正しい語形成〉と呼ばれる詩的美質がある。「名詞接辞で終わる複数項目〔と〕定動詞接辞で終わる複数項目の転換が〈正しい語形成〉である」という定義に基づいて。

マッリナータは自身の説明の根拠として〈正しい語形成〉のある定義を引用する。その典拠は不明であるが、「派生」(vyutpatti) ではなく「転換」(parāvṛtti) という言葉を使う同定義は、ヴィディアーナータが与える玉虫色の定義に比べ、より具体的である。上に分析した ŚV 1.51 の構造が、ここで言われる「転換」とは何かを教えてくれる。ŚV 1.51 では (1) avaskanda から (2) lunīhi へ、(2) lunīhi から (3) muṣāṇa へ、(3) muṣāṇa から (4) hara へというように、全て A 3.4.3 により派生する異なる定動詞形が次々に起こった後、当該規則と連関する A 3.4.5 により規定される (5) cakre の追加使用が定動詞形の連鎖を締めくくっている。これが「定動詞接辞で終わる複数項目の転換」である。必然的にそれには定動詞形の多様性 (tinvaicitrya) が付随する。マッリナータがここで〈定動詞形の正しい語形成〉を念頭に置いていることは明らかである。

4 〈名詞形の正しい語形成〉

〈名詞形の正しい語形成〉の考察に移ろう。それにあたっては、ヴィディアーナータが〈正しい語形成〉の例として提示する詩節の分析が有用である。

4.1 Pratāparudrayaśobhūṣaṇa の詩節

詩節は以下の通りである。

PYBh (328.4–7): (1) āśāmaṅḍalakūlamudvahakathair (2) abhraṅkaṣair vaibhavai
 (3) rakṣan (4) suprajasaḥ prajāś (5) tribhuvanakṣemaṅkaraprakriyah |
 (6) duṣṭānām bhuvī niprahantum atulair (7) āḍhyambhaviṣṇur guṇair

(8) bhūmnā sañcarate 'dya kākatikule rudrāvātāro hariḥ ||

多数の地域の境界を取り去る（地の果てまで知れ渡る）物語を生む、雲を擦る（卓越した）神力により、良き子孫を持つ臣民達を守護するため、三界に安寧をもたらす優れた活動をなす者として、悪人達を地上で打ち倒すべく、比類無き諸美点に溢れる者となり、ルドラの姿をとって、ハリは今カーカティー族のもとで力強く動き回っている¹¹。

当該詩節において定動詞形は (8) sañcarate のみであり、他は全て名詞形である。下線で示した語が、注釈者クマラスヴァーミン (Kumārasvāmin, 15世紀頃) が上掲詩節に〈正しい語形成〉が成立する根拠と見なすものである。彼によれば、それらの派生に主として考慮されるべきは次の諸規則である (RĀ on PYBh [328.11–20])。

(1) A 3.2.31: udi kūle rujivahoḥ ||

「〈目的〉を表示する kūla (「岸、土手、縁」) という語が共起項目であるとき、ud-ruj (「壊す」) と ud-vah (「運び出す」) の後に kṛt 接辞 KHaŚ が起こる」

[説明] kūlamudvah[ās] (「境界を取り去る [物語]」) という語は、kūlam udvahanti と意味分析される。〈目的〉 (karman) を表示する kūla という語を共起項目とする ud-vah の後には、A 3.2.31 により kṛt 接辞 KHaŚ が起こり、A 2.2.19: upapadam atinī により kūlamudvaha という複合語が形成される。複合語 kūlamudvaha における m 音は、A 6.3.67: arurviśadajantasya mum により kūla という語の最終母音 a に付加される付加辞 mUM であり、第二格単数接辞 am の m 音ではない点に注意したい。MIT である付加辞 mUM は、A 1.1.47: mid aco 'ntyāt paraḥ により母音のうちの最終母音の後に付加される。以下も同様である。

(2) A 3.2.42: sarvakūlābhraḥkaṣeṣu kaṣaḥ ||

「〈目的〉を表示する sarva (「全て」)、kūla (「岸、土手、縁」)、abhra (「雲」)、kaṣa (「雌牛の糞」) が共起項目であるとき、動詞語基 kaṣ (「ひっかく、削りとる」) の後に kṛt 接辞 KHaC が起こる」

[説明] abhraṅkaṣ[ās] (「雲を擦る [神力]」) という語は、abhraṅkaṣanti と意味分析される。〈目的〉を表示する abhra という語を共起項目とする動詞語基 kaṣ の後には、A 3.2.42 により kṛt 接辞 KHaC が起こり、abhraṅkaṣa という複合語が派生する。abhra という語がとる付加辞 mUM の m 音には A 8.3.23: mo 'nusvāraḥ により anusvāra (ṁ) が代置され、その anusvāra には後続する k 音の同類音である ṅ 音が A 8.4.58: anusvārasya yayi parasavarṅaḥ により代置される。以下に見る (5) kṣemaṅkara も同様である。

(3) A 3.2.126: lakṣaṅahetvoḥ kriyāyāḥ ||

「行為の特徴または行為の原因が理解される時、動詞語基に後続する IAT 接辞に ŚatR と ŚānaC が代置される」

[説明] rakṣat (「守護するために」) は、動詞語基 rakṣ に後続する現在接辞 IAT (A 3.2.123: vartamāne laṭ) に、A 3.2.126 により ŚatR が代置されて派生する語形である。rakṣ が表示する守護行為は、ヴィシュヌが三界に安寧をもたらす活動をなす原因 (hetu) である。

¹¹ ヴィディアーナータの Pratāparudrayaśobhūṣaṇa は、南インドのカーカティーヤ王朝 (1100–1323 年頃) プラターパルドラ二世 (在位 1295–1323 年頃) の庇護下で著されたものである。その特徴の一つは、原則として同王の賞賛を意図する自作の実例 (udāharaṇa) が与えられることである。当該詩節もそのような詩節の一つであり、詩節中に述べられるルドラ／ハリはプラターパルドラ二世を指す。

(4) A 5.4.122: nityam asic prajāmedhayoḥ ||

「nañ, dus, su に後続する prajā (「子孫」) と medhā (「知恵」) という語で終わる bahuvrīhi の後に、複合語の最終要素となる taddhita 接辞 asIC が必ず起こる」

[説明] suprajas (「良き子孫を持つ [臣民達]」) は、su と prajā の二項目からなる bahuvrīhi 複合語 suprajā の後に、複合語の最終要素 (samāsānta) となる taddhita 接辞 asIC が A 5.4.122 により導入されて派生する語形である (suprajā + asIC → suprajā + as [A 6.4.148: yasyeti ca])。

(5) A 3.2.44: kṣemapriyamadre 'ṇ ca ||

「〈目的〉を表示する kṣema (「安寧」)、priya (「愛しいもの」)、madra (「楽しみ」) という語が共起項目であるとき、動詞語基 kr (「つくる、なす」) の後に kṛt 接辞 KHaC に加えて aṇ も起こる」

[説明] kṣemaṅkar[ā] (「安寧をもたらす [優れた活動]」) という語は、kṣemaṅ karoti と意味分析される。〈目的〉を表示する kṣema という語を共起項目とする動詞語基 kr の後には、A 3.2.44 により kṛt 接辞 KHaC が起こり、kṣemaṅkara という複合語が派生する。

(6) A 2.3.56: jāsiniprahaṇanāṭakrāthapiṣāṃ himsāyām ||

「cur 群の動詞語基 jas, ni と pra に先行される動詞語基 han、NiC で終わる動詞語基 naṭ と krath、動詞語基 piṣ、これらが表示する傷害行為の〈目的〉が〈残余〉として意図されるとき、第六格接辞が起こる」

[説明] duṣṭānām . . . niprahantum (「悪人達を打ち倒すために」) において、ni-pra-han が表示する行為の〈目的〉である悪人は〈残余〉(śeṣa)、すなわち打ち倒す行為と単に関係するものとして意図されている (sambandhamātra)。duṣṭa という語の後には A 2.3.56 に基づいて第六格接辞が起こる。

(7) A 3.2.57: kartari bhuvaḥ kṣiṣṇuckhukañau ||

「CvI 接辞の意味を有するが CvI 接辞で終わる項目ではない (cvyartheshv acvau)、名詞接辞で終わる āḍhya (「豊富な」)、subhaga (「幸運な」)、sthūla (「巨大な」)、palita (「灰色の」)、nagna (「裸の」)、andha (「盲目の」)、priya (「愛しい」) という語が共起項目である場合、〈行為主体〉が表示されるべきときに動詞語基 bhū (「なる」) の後に kṛt 接辞 KHiṣṇuC と KHukañ が起こる」

[説明] āḍhyambhaviṣṇur (「[美点に] 溢れる者となった [ハリ]」) という語は、anāḍhya āḍhyo bhavati (「豊富でない者が豊富な者になる」) と意味分析される。CvI 接辞の意味を有する āḍhya という語を共起項目とする動詞語基 bhū の後には、A 3.2.57 により kṛt 接辞 KHiṣṇuC が起こり、āḍhyambhaviṣṇu という複合語が形成される (āḍhyambhaviṣṇu → āḍhyambhaviṣṇu [A 8.3.23] → āḍhyambhaviṣṇu [A 8.4.58])。

(8) A 1.3.54: samas ṭṛtīyāyuktāt ||

「〈行為主体〉が表示されるべきとき、第三格接辞で終わる項目と結びつく、sam に先行される動詞語基 car (「動き回る」) の後に ātmanepada が起こる」

[説明] bhūmnā sañcarate (「力強く動き回っている」) において、sam-car は、bhūmnā という第三格接辞で終わる項目と共使用 (samabhivyāhāra) されている¹²。動詞語基 car に後続する ātmanepada 接辞 ta (→ te [A 3.4.79 ṭīta ātmanepadānāṅ ṭer e]) は A 1.3.54 に基づく。

¹²BM on SK 2727 (III.567.19): sampūrvāt ṭṛtīyāntasamabhivyāhṛtāc carer ātmanepadam ity arthaḥ |

ヴィディアーナータとクマーラスヴァーミンは上に引用した詩節に〈正しい語形成〉が成立する理由を明確に述べない¹³。そこで、本論 3.1-2 で見た〈定動詞形の正しい語形成〉の成立条件に当てはめて当該詩節の分析を試みたい。

4.2 詩節の分析

まず注目すべきは、(1) *āsāmaṇḍalakūlamudvahakathaiḥ* (「多数の地域の境界を取り去る物語を生む [神力] によって」)、(2) *abhraṅkaṣaiḥ* (「雲を擦る [神力] によって」)、(5) *tribhuvanakṣemaṅkarapra-kriyaḥ* (「三界に安寧をもたらす優れた活動をなす者として」)、(7) *ādhyambhaviṣṇuḥ* (「[諸美点に] 溢れる者となって」) という四つの名詞形である。(1) は KHaŚ で終わる *kūlamudvaha* という語を構成要素とする名詞語基から、(2) は KHaC で終わる *abhraṅkaṣa* という名詞語基から、(5) は同じく KHaC で終わる *kṣemaṅkara* という語を構成要素とする名詞語基から、(7) は KHiṣṇuC で終わる *ādhyambhaviṣṇu* という名詞語基から派生する名詞形である。KHaŚ、KHaC、KHiṣṇuC という三接辞の共通点は、1. いずれも共起項目の存在を根拠として動詞語基の後に導入される *kṛt* 接辞 (*sopapadakṛt*) であること、2. 三者とも KH 音を指標辞 (IT) とする接辞であり、それらの後続は共起項目の最終母音に対する mUM 付加操作の適用根拠となることである。mUM の付加は、後続する子音に合わせた m 音の音素変化を促す ([2]; [5] m → ṁ → ṅ, [7] m → ṁ → m)。このように、(1)、(2)、(5)、(7) は、共通点のある接辞の導入規則 (A 3.2.31; 3.2.42; 3.2.44; 3.2.57)、当該規則と相関する m 音付加規則 (A 6.3.67) と音素変化規則 (A 8.3.23; 8.4.58) が適用されることで派生した異なる名詞形であり、詩節中ではそれらが次々と起こっている。

次に (4) *suprajasah prajāś* (「良き子孫を持つ臣民達を」) という表現に目を向けよう。*suprajasah* は、*taddhita* 接辞 *asIC* で終わる *bahuvrīhi* 複合語 *suprajas* という名詞語基の後に、第二格複数接辞 Śas が導入された後 (*suprajas + Śas*)、その s 音に A 8.2.66: *sasajuṣo ruḥ* により rU が代置され (*suprajas + arU*)、r 音に A 8.3.15: *kharavasānayor visarjanīyaḥ* により *visarga* (h 音) が代置されて派生する名詞形である (*suprajas + aḥ*)。対して、*prajāś* は *prajā* という名詞語基の後に同じく Śas が導入され (*prajā + Śas*)、*prajā* の ā 音と Śas の a 音に A 6.1.101: *akaḥ savarṇe dīrghaḥ* により長音 ā が唯一代置 (*ekādeśa*) された後 (*prajāś*)、先述の A 8.2.66 と A 8.3.15 が適用され (*prajārU → prajāḥ*)、さらに A 8.3.34: *visarjanīyasya saḥ* により *visarga* に s 音が代置されて派生する名詞形である (*prajāś*)。ここでは、*prajā* という共通の名詞語基から派生した、格は同じだが語形は異なる二つの名詞形の転換がなされている (*suprajasah → prajāś*)。

prajā という語が意味する「臣民」は、(3) *rakṣan* (「守護するために」) が表示する守護行為の〈目的〉である。*prajā* という語の後には A 2.3.2: *karmaṇi dvitīyā* により第二格接辞が起る。この *prajāḥ* という第二格接辞で終わる項目との関連で注意を引くのは、(6) *duṣṭānām . . . nīprahantum* (「悪人達を打ち倒すために」) である。同表現において、「悪人」(*duṣṭa*) は実際には *ni-pra-han* が表示する行為の〈目的〉であるが、それは〈残余〉として意図されているので、A 2.3.56 により *duṣṭa* という語の後には第六格接辞が起る。ここには、*prajāḥ* という第二格接辞で終わる名詞形と *duṣṭānām* という第六格接辞で終わる名詞形の対比が見られる。〈目的〉を表示する名詞接辞の導入規則 (A 2.3.2) に従って派生した名詞形 *prajāḥ* が、同規則と連関する別の名詞接辞導入規則 (A 2.3.56) に従って派生した別の名詞形 *duṣṭānām* へと転換している。

¹³クマーラスヴァーミンはヴィディアーナータが引用する詩節に以下のような説明を与えるが、結局のところどのような場合に〈正しい語形成〉が成立するのかは判然としない。RĀ on PYBh (328.21-23): *atra tu sakalāsacetaścetaścamatkāraḥkāriviśiṣṭapadaprayogeṇa cārūtāhetutvasambhāvād asty eva svatantraṁ guṇatvam iti |* (「しかしここでは、全ての意識ある者達の心に感動をもたらす特定の諸語の使用に基づいて、[〈正しい語形成〉は] 魅力の原因であり得るから、[〈正しい語形成〉は] まさに自ずと詩的美質である」) クマーラスヴァーミンは、ヴィディアーナータの定義中の *supāṁ tinām ca* を「特定の、名詞接辞と定動詞接辞で終わる複数項目の [派生]」(*subantatiṅnantaviśeṣānām*) と説明する (RA on PYBh [328.11])。

最後に (3) rakṣan (「守護するために」) と (8) bhūmnā sañcarate (「力強く活動している」) の関係に触れておきたい。既に説明したように、rakṣan は、動詞語基 rakṣの後に現在接辞 IATが起り、それに A 3.2.126 により ŚatRが代置されて派生する語、sañcarate は、sam-car の後に IATが起り、それに A 1.3.54 によって定動詞接辞 ta が代置されて派生する語である。ŚatRは A 1.4.99: laḥ parasmaipadam により parasmaipada と呼ばれ、一方 ta は A 1.4.100: tañānāv ātmanepadam により ātmanepada と呼ばれる。rakṣan と sañcarate という二つの語形により、1音の代置要素としての ŚatR と ta、そして parasmaipada と ātmanepada という二つの術語 (sañjñā) が対比されている。rakṣan が名詞接辞で終わる項目であるのに対して sañcarate は定動詞接辞で終わる項目である。憶測に過ぎないが、クマラスヴァーミンは、ここには名詞形から定動詞形への転換が見られると考えたのかもしれない。

4.3 マッリナータの解釈

マッリナータは Bhaṭṭikāvya に対する注釈中で Pratāparudrayaśobhūṣaṇa から〈正しい語形成〉の定義を引用しているから (本論 1)、ヴィディアーナータが挙げるその例も知っていたと想定してよい。マッリナータとヴィディアーナータがいずれもインド南東部アーンドラ地方で活躍した人物であること並びに前者が美文作品に対する諸注釈中で頻繁に後者の言葉を引用していることは、マッリナータがヴィディアーナータの詩論書に精通し、それを座右に備えていたことを示す。

ヴィディアーナータの詩節の核心が名詞形の転換にあることは明白である¹⁴。このことは、彼の「名詞接辞で終わる複数項目と定動詞接辞で終わる複数項目の派生」という〈正しい語形成〉の定義が、マッリナータが引用する「名詞接辞で終わる複数項目 [と] 定動詞接辞で終わる複数項目の転換」というそのより具体的な定義 (本論 3.2) と同趣旨であることを十分に示唆する。ヴィディアーナータが〈正しい語形成〉の例として提示するのは上述の詩節のみであるから、彼自身がマッリナータと同様に〈正しい語形成〉に二種のを認めていたかどうかは定かではない。しかし、それを認め、ŚV 1.51 に〈定動詞形の正しい語形成〉を見るマッリナータは、名詞形の多様性を根拠として、ヴィディアーナータの例に〈名詞形の正しい語形成〉を見たに違いない¹⁵。

5 Bhaṭṭikāvya への適用

Bhaṭṭikāvya はパーニニ (Pāṇini、紀元前 5–4 世紀頃) の文法規則の例証を眼目とする作品であるから (SP on BhK 1.1 [I.1.13]: pāṇinīyasūtrāṇām udāharaṇaṃ kāvyam)、そこには定動詞形の転換や名詞形の転換が看取される詩節が無数に存在する。それぞれ二つずつ、異なる型の例を示しておこう。

5.1 〈定動詞形の正しい語形成〉の例

以下は、定動詞の部に属する、アオリスト形を扱う第 15 章中の一詩節である。

¹⁴ 〈正しい語形成〉の概念を考慮すれば、ヴィディアーナータの定義中の vyutpatti という語は「多様な生起」(vividhotpattiḥ) という意味で解釈されるべきかもしれない。しかし、マッリナータやクマラスヴァーミン等の古典注が vyutpatti という語の意味を説明しないことを考えると、同語は文法学の分野でよく知られた一般的な意味、すなわち「派生」という意味で解釈されていた可能性が高い。なお、vyutpatti という語が所謂「派生」を意味する場合、伝統的には「特定の形での生起」(viśeṣnotpattiḥ) という意味分析が想定される。この場合、同語は saṃskāra (「形成」) という語と同義である。ŚKD (IV.553.27–28): viśeṣnotpattiḥ | saṃskārah |

¹⁵ 11 世紀前半の詩論家ボージャ (Bhoja) も自身の詩学書 Sarvasvatīkaṇṭhābharāṇa において〈正しい語形成〉(suśabdatā) について論ずるが (SKĀ [61.23–62.4])、本稿の目的に資する新規情報はない。

BhK 15.2: te ⁽¹⁾’bhyagur bhavanaṃ tasya suptaṃ ⁽²⁾caikṣiṣatātha tam |
⁽³⁾vyāhārsus tumulān śabdān daṇḍaiś ⁽⁴⁾cāvadhiṣur drutam ||

その「悪魔達」は彼（クンバカルナ）の住処へやって来た（abhyagur）。そして次に、眠っている彼を目にした（aikṣiṣata）。「悪魔達は彼を起こすべく」大きな声をあげた（vyāhārsus）。さらに、棒で素早く叩いた（avadhiṣur）。

同詩節では、(1) abhyagur (abhi-i 3rd pl. aorist P.)、(2) aikṣiṣata (īkṣ 3rd pl. aorist Ā.)、(3) vyāhārsus (vi-ā-hṛ 3rd pl. aorist P.)、(4) avadhiṣur (han 3rd pl. aorist P.) という四つのアオリスト形が使用されている。いずれも、A 3.2.110: luṅ (「過去時に属する行為を表示する動詞語基の後に IUN 接辞が起こる」) によるアオリスト接辞 IUN の導入を契機とする、アオリスト形に関わる諸規則の適用により派生するものである。煩を恐れ、その派生手続きを逐一説明することは控える。

次の詩節は、同じく定動詞の部に属する、願望法接辞 IIN の導入規則を例証する一詩節である。

BhK 19.5: ⁽¹⁾mriyeyordhvaṃ muhūrtād dhi na ⁽²⁾syās tvaṃ yadī me gatiḥ |
 āsāmsā na hi naḥ prete ⁽³⁾jīvema daśamūrdhani ||

「[ラーヴァナが死んでから] 1 ムフルタ過ぎた時に私は死ぬべきだった (mriyeya)、実に、貴方 (ラーマ) がもし私の寄る辺でなかったなら (syās)。何故なら我らは願わないからである。十頭者 (ラーヴァナ) が死んだのに生き延びたいとは (jīvema)」

(1) mriyeya (mr 1st sg. optative Ā.) により次の IIN 導入規則の例証が意図されている。

A 3.3.164: liṅ cordhvamauhūrtike ||

「促進 (praiṣa)、自由活動の承認 (atisarga)、ふさわしい時間 (prāptakāla) が理解されるとき、ムフルタ時間後の時間に属する行為を表示する動詞語基の後に IIN 接辞、IOT 接辞、krtya 接辞が起こる」

上記詩節において、「私」はふさわしい時を得た者 (prāptakāla) として表現されている。(1) mriyeya は、「ふさわしい時」が理解されるときに導入される IIN が動詞語基 mr に後続する語形である¹⁶。(2) syās (as 2nd sg. optative P.) によっては次の IIN 導入規則が例証される。

A 3.3.156: hetuhetumator liṅ ||

「原因または結果である行為を表示する動詞語基の後に任意に IIN 接辞が起こる」

詩節において動詞語基 as は「死なないこと」の原因 (hetu) となる「[寄る辺としてのラーマの] 存在行為」を表示する。当該の動詞語基に後続する IIN 接辞は A 3.3.156 に基づく¹⁷。BhK 19.5cd 句における āsāmsā na . . . naḥ . . . jīvema (「我らは願わない、生き延びたいとは」) という表現によって例証されるのは、次の IIN 導入規則である。

¹⁶なお、Kāśikāvṛtti が挙げる例は次の通りである (KV on A 3.3.164 [I.289.10–11])。

krtya 接辞の例—「1 ムフルタが過ぎた後に貴方は、今、マットを作りなさい／作ってもよい／作るにふさわしい」(urdhvaṃ muhūrtāt upari muhūrtasya bhavatā khalu kaṭaḥ kartavyaḥ karaṇīyaḥ kāryaḥ)。

IIN 接辞と IOT 接辞の例—「[1 ムフルタが過ぎた後に] 貴方は、今、マットを作りなさい／作ってもよい／作るにふさわしい」(bhavān khalu kaṭam kuryāt | bhavān khalu karotu)。

この例において、「貴方」(bhavat) は促された者 (preṣita)、自由行動を認められた者 (atisṛṣṭa)、ふさわしい時を得た者 (prāptakāla) として表現されている (KV on A 3.3.164 [I.289.11]: bhavān iha preṣitaḥ | bhavān atisṛṣṭaḥ | bhavān prāptakālaḥ)。

¹⁷Kāśikāvṛtti は次のような例を挙げる (KV on A 3.3.156 [I.287.16–17])。

A 3.3.134: āśaṁsāvācane liṅ ||

「āśaṁsā (「願い」) の意味を表示する項目が共起項目であるとき、動詞語基の後に IIN 接辞が起こる」

BhK 19.5c 句において「願い」という意味を表示する āśaṁsā という語が動詞語基 jīv の共起項目として使用されている。jīvema (jīv 1st pl. optative P.) は動詞語基 jīv の後に A 3.3.134 により IIN 接辞が導入されて派生する定動詞形である。以上のように、BhK 19.5 では、三種の IIN 導入規則の適用により派生する同族の定動詞形が連続して使用されている。

5.2 〈名詞形の正しい語形成〉の例

次の詩節は、主題の部に属する、A 3.2.134: ā kves tacchīlataddharmatatsādhukāriṣu の支配下にある kṛt 接辞導入規則を例証する一詩節である。

BhK 7.3: (1)nirākariṣṇavo bhānuṃ divaṃ (2)vartiṣṇavo 'bhitaḥ |
(3)alaṅkariṣṇavo¹⁸ bhāntas taḍitvantaś (4)carīṣṇavaḥ ||

[雨期には] いつも、天空の両側にまで広がって (vartiṣṇavo) [太陽] 光を遮り (nirākariṣṇavo)、雷光を持って輝いて天空を飾りながら (alaṅkariṣṇavo) 漂っている (carīṣṇavaḥ) [雲々が]。

例証されるのは以下の規則である。

A 3.2.136: alaṅkṛṇīrākṛṇīprajanotpacotpatonmadarucyapatrapavṛtuvṛdhusahacara iṣṇuc ||

「ある行為をなすことを傾向とする〈行為主体〉、ある行為をなすことを義務とする〈行為主体〉、またはある行為を巧みになす〈行為主体〉が表示されるべきとき、alam-kṛÑ (「飾る」)、nir-ā-kṛÑ (「退ける」)、pra-jan (「生まれる」)、ud-pac (「熟する」)、ud-pat (「飛び上がる」)、ud-mad (「狂う、酔う」)、ruc (「光を放つ、喜ばす」)、apa-trap (「恥じる」)、vṛt (「起こる」)、vṛdh (「増える」)、sah (「耐える」)、car (「動き回る」) の後に、kṛt 接辞 iṣṇuc が起こる」

BhK 7.3 では、A 3.2.136 の適用により派生する nirākariṣṇavo (「退ける傾向にある [雲々]」)、vartiṣṇavo (「起こる傾向にある [雲々]」)、alaṅkariṣṇavo (「飾る傾向にある [雲々]」)、carīṣṇavaḥ (「漂う傾向にある [雲々]」) という四つの異なる名詞形が次々と起こっている。

以下の詩節は、kṛt 接辞Ṭa の導入を規定する四規則を例証する。

BhK 5.97: dviṣaṇ (1)vanecarāgryāṇāṃ tvam (2)ādāyacaro vane |
(3)agresaro jaghanyānāṃ mā bhūḥ (4)pūrvasaro mama ||

「敵よ、苦行者達 (vanecara-) のうちの最上者達を森で捕まえて食べる (ādāyacaro) お前、下劣な者達の先頭を走る (agresaro) お前が、私の前を走る (pūrvasaro) でない」

(1) A 3.2.16: careṣ ṭaḥ ||

「〈基体〉を表示する、名詞接辞で終わる項目が共起項目であるとき、動詞語基 car (「動き回る」) の後に kṛt 接辞Ṭa が起こる」

「右を進めば、荷車は転覆しないだろう」 (dakṣiṇena ced yāyān na śakaṭaṃ paryābhavet)。

この事例では、「右を進むこと」が原因であり、「転覆しないこと」が結果である (KV on A 3.3.156 [I.287.17]: dakṣiṇena yānāṃ hetuḥ aparyābhavanaṃ hetumat)。

¹⁸マツリナータは alaṅkariṣṇuvad と読むが、その読みでは意図的に繰り返されている -iṣṇavo bh- という音の連鎖が崩れる。ジャヤマンガラの読みがバツティ本来の読みと考えるべきである。川村 2015 を見よ。

(2) A 3.2.17: bhikṣāsenādāyeṣu ca ||

「bhikṣā（「施し」）、senā（「軍隊」）、ādāya（「とって」）という語が共起項目であるとき、動詞語基 car の後に kṛt 接辞Ta が起こる」¹⁹

(3) A 3.2.18: puro'grato'greṣu sartheḥ ||

「puras（「先に」）、agratas（「先に」）、agre（「先に」）という語が共起項目であるとき、動詞語基 sr（「走る、流れる」）の後に kṛt 接辞Ta が起こる」

(4) A 3.2.19: pūrve kartari ||

「〈行為主体〉を指示する pūrva（「先行者」）という語が共起項目であるとき、動詞語基 sr（「走る、流れる」）の後に kṛt 接辞Ta が起こる」

(1) vanecar[ās]（「森で動き回る者達、苦行者達」）という語は vane caranti と意味分析される。〈基体〉を表示する、第七格接辞で終わる vane という語を共起項目とする動詞語基 car の後には、A 3.2.16 により kṛt 接辞Ta が起こり、vanecara という複合語が派生する²⁰。(2) ādāyacarō（「捕まえて食べる [ラーヴァナ]」）という語は、ādāya carati と意味分析される。動詞語基 car は、第一格単数接辞 sU で終わる不変化詞（avyaya）と見なされる ādāya という語を共起項目とする。それ故、A 3.2.17 により car の後に kṛt 接辞Ta が起こり、ādāyacara という複合語が派生する²¹。(3) agresaro（「先頭を走る [ラーヴァナ]」）という語は、agre sarati と意味分析される。agre という不変化詞を共起項目とする動詞語基 sr の後には、A 3.2.18 により kṛt 接辞Ta が起こり、agresara という複合語が派生する。(4) pūrvasaro（「先行者として走る [ラーヴァナ]」）という語は pūrvaḥ sarati と意味分析される。走る行為の〈行為主体〉を指示する pūrva という語を共起項目とする動詞語基 sr の後には、A 3.2.19 により kṛt 接辞Ta が起こり、pūrvasara という複合語が派生する²²。

このように、BhK 5.97 には一連の kṛt 接辞Ta 導入規則により派生する名詞形の転換が見られる。

6 結論

マッリナータの見解では、文法的に正しい複数の名詞形や定動詞形が作中で単に使用されるだけでは〈正しい語形成〉は認められない。その成立のためには、派生に関して共通点を持つ同族の名詞形または動詞形が美文の一詩節中に連続して使用される必要がある。マッリナータが言及する未詳の詩論家は、その現象を「名詞接辞で終わる複数項目 [と] 定動詞接辞で終わる複数項目の転換」と呼び、ヴィディアーナータは、おそらくバーマハの言葉を受け継いで「名詞接辞

¹⁹Kāśikāvṛtti が挙げる例 bhikṣācara, senācara, ādāyacara を (KV on A 3.2.17 [I.214.20–21])、Padamañjarī は次のように説明する。PM on KV to A 3.2.17 (II.554.11–13): caratir atra tatpūrvake arjane vartate | caraṇena bhikṣām arjayatī arthaḥ | senācara iti | senām praviśann ucyate | ādāyacara iti | ādāya gacchatī arthaḥ | bhakṣayatī vā | 「この [第一の例] において動詞語基 car はその [動詞語基 car の意味『動き回り』] を前提とした入手を意味する。[bhikṣācara という語は、] 動き回ることによって施しを得る者を意味する。senācaraḥ について。軍隊に入りつつある者が [senācara という語により] 表示される。ādāyacaraḥ について。とってから行く者という意味である。あるいは [とって] 食べる者 [という意味である]」

²⁰同複合語は名詞接辞にゼロが代置されない aluksamāsa である (A 6.3.14: tatpuruṣe kṛti bahulam)。

²¹ādāya という語は、ā-dā の後に A 3.4.21: samānkartrkayoḥ pūrvakāle により kṛt 接辞 Ktvā が起こり、A 7.1.37: samāse 'nañpūrve ktvo lyap により Ktvā 全体に LyaP が代置されて派生する。ādāya は A 1.1.40: ktvātosunkasunaḥ により avyaya と呼ばれる項目であり、術語 avyaya を適用される項目は A 2.4.82: avyayād āpsupah により名詞接辞で終わる項目 (subanta) と見なされる。avyaya に後続する名詞接辞として第一格単数接辞が想定される点については川村 2014b: 121, note 8 を見よ。

²²仮に pūrva という語が〈目的〉を表示する場合には、A 3.2.1: karmaṇy aṇ により kṛt 接辞 aN が起こり、pūrvasara ではなく pūrvasāra という語形になる。KV on A 3.2.19 (I.215.5–6): kartarīti kim | pūrvaṃ deśam saratīti pūrvasāraḥ |

で終わる複数項目と定動詞接辞で終わる複数項目の派生」と呼んだ。マッリナータは〈正しい語形成〉の特徴を名詞形や定動詞形の多様性 (vaicitrya) という言葉で表現した。無論、相関する名詞形や定動詞形は闇雲に多用されるべきではない。それらは詩節の内容や文脈に適合するものでなければならない。

〈正しい語形成〉は、詩的美質として、美文作品に輝きをもたらすものである (kāvyasobhākara)。マッリナータは Bhaṭṭikāvya が文法規則の例証作品である点に着眼し、その文法学部門を詩学的観点から特徴づけるものとして、規則例証に伴う美質〈正しい語形成〉を挙げた。同部門が有する、パーニニ文法の該博な知識が反映された言語運用の多様性 (prayogavaicitrī) に、彼は詩的価値を見出したのである。

略号及び参考文献

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*. See Appendix III (Aṣṭādhyāyīsūtrapāṭha) in Cardona 1997.

Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–72 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali: Edited by F. Kielhorn*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series 18–22, 28–33. 3 vols. Bombay: Government Central Press, 1880–1885. Third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962–72.

Aryendra Sharma, Khanderao Deshpande, and D. G. Padhye

1969–70 *A Commentary on Pāṇini's Grammar by Vāmana & Jayāditya*. Sanskrit Academy Series 17, 20. 2 vols. Hyderabad: Sanskrit Academy.

Bāpata, Govinda Shankara Shāstrī

1887 *The Bhaṭṭikāvya of Bhatti with the Commentary (Jayamangalā) of Jayamangala*. Bombay: Nirṇaya Sāgara Press.

BhK: Bhaṭṭi's *Bhaṭṭikāvya*. See (1) Bāpata 1887 and (2) Trivedī 1898.

BM: Vāsudeva Dīkṣita's *Bālamānoraṃā*. See Caturveda and Bhāskara 1958–61.

Cappeller, Carl

1875 *Vāmana's Lehrbuch der Poetik*. Jena: Verlag von Hermann Dufft.

Cardona, George

1997 *Pāṇini: His Work and its Traditions*. Volume One. Background and Introduction. Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second edition, revised and enlarged, 1997.

Caturveda, Giridhara Śarmā and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara

1958–61 *Śrīmadbhaṭṭojidīkṣitaviracitā vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī śrīmadvāsudevadīkṣitapraṇīṭayā bālamānoraṃākhyavyākhyayā śrīmajjñānendrasarasvatīviracitayā tattvabodhinyākhyavyākhyayā ca sanāthitā*. 4 vols. Varanasi: Motilal Banarsidass.

Deva, Raja Radha Kanta

1967 *Shabda-Kalpadrum or an Encyclopædia Dictionary of Sanskrit Words Arranged in Alphabetical Order Giving the Etymological Origin of the Words according to Panini, their Gender, Various Meanings and Synonyms, and Illustrating their Syntactical Usage and Connotation with Quotations Drawn from Various Authoritative Sources such as Vedas, Vedānta, Nyaya, Other Darshana, Purāṇetihas, Music, Art, Astronomy, Tantra, Rhetorics and Prosody and Medicine etc.*. The Chowkhamba Sanskrit Series 93. 5 vols. Third edition. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.

Durgāprasāda, Paṇḍit and Paṇḍit Śivadatta

1923 *The Śīsupālavadhā of Māgha with the Commentary (Sarvaṅkashā) of Mallinātha*. Revised by T. Śrinivāsa Venkatrāma Śarma. Eighth edition. Bombay: Pāndurang Jāwājī.

KA: Bhāmaha's *Kāvyaḷaṅkāra*. See Trivedī 1909.

Kak, Ram Chandra and Harabhatta Shastri

1990 *Māghabhaṭṭa's Śīsupālavadhā: The Commentary (Sandeha-Viṣauṣadhi) of Vallabhadeva (Complete)*. Delhi: Bharatiya Book Corporation.

KAS: Vāmana's *Kāvyaḷaṅkārasūtra*. See Cappeller 1875.

KASV: Vāmana's *Kāvyaḷaṅkārasūtravṛtti*. See Cappeller 1875.

Katre, Sumitra Mangesh

1967 *Pāṇinian Studies I*. Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 52. Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute.

Kawamura, Yuto (川村 悠人)

2014a 「*Bhaṭṭikāvya* における定動詞の部 (tiṅantakāṇḍa) の役割」『南アジア古典学』9: 371–396.

2014b 「カーリダーサの非文法的表現 *viśrāma* に関する一考察」『哲学』66: 109–122.

2015 「*Bhaṭṭikāvya* 8.91–92 における6つの *api*—規則例証と詩的技巧—」『哲学』66: 43–56.

KV: Jayāditya and Vāmana's *Kāśikāvṛtti*. See Aryendra Sharma, Khanderao Deshpande, and D. G. Padhye 1969–1970.

Madhavan, K.

2001 *The Bhaṭṭikāvya: A Critical Appraisal*. Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar.

MBh: Patañjali's *Mahābhāṣya*. See Abhyankar 1962–72.

Miśra, Śrīnārāyaṇa

1985 *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana (along with Commentaries Vivaraṇapañcikā-Nyāsa of Jineन्द्रabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra)*. Ratnabharati Series 5–10. 6 vols. Varanasi: Ratna Publications.

PM: Haradatta's *Padamañjarī*. See Miśra 1985.

PYBh: Vidyānātha's *Pratāparudrayaśobhūṣaṇa*. See Trivedī 1909.

RĀ: Kumārasvāmin's *Ratnāpaṇa*. See Trivedī 1909.

Raghavan, Venkatarama

1978 *Bhoja's Śṛṅgāra Prakāśa (Recipient of the Sahitya Akademi Award for the Best Book of Sanskrit Research)*. Third revised enlarged edition. Madras: Punarvasu.

Śarmā, Paṇḍit Kedāranāth and Wāsdev Laxmaṇ Śāstrī Paṇḍīkar

1934 *The Sarasvatī Kaṅṭhābharaṇa by Dhāreshvara Bhojadeva: With Commentaries of Rāmasinha (I–III) and Jagaddhara (IV)*. Kāvyaṃālā 94. Second edition. Bombay: Pāndurang Jāwājī.

Sarvaṅkaṣā: Mallinātha's *Sarvaṅkaṣā*. See Durgāprasāda and Śivadatta 1923.

Siromani, D. T. Tatacharya

1934 *Bhāmaha's Kāvyaḷaṅkāra with Udyāna Vṛtti, a Lucid Commentary, English and Sanskrit Introduction, (Index), and an Appendix Dealing with Alankarikas*. Foreword by M. Krishnamachariar. Tiruvadi: The Srinivasa Press.

SK: Bhaṭṭoji Dīkṣita's *Siddhāntakaumudī*. See Caturveda and Bhāskara 1958–61.

SKĀ: Bhoja's *Sarasvatīkaṅṭhābharaṇa* on poetics. See Śarmā and Paṇḍīkar 1934.

ŚKD: *Śabdakalpadruma*. See Deva 1967.

SP: Mallinātha's *Sarvaṅkaṣā*. See Trivedī 1898.

ŚV: Māgha's *Śiśupālavadhā*. See Kak and Shastri 1990.

SVO: Vallabhadeva's *Sandehaviṣṭausadhī*. See Kak and Shastri 1990.

Trivedī, Kamalāśaṅkara Prāṇaśaṅkara

1898 *The Bhaṭṭi-Kāvya or Rāvaṇavadhā Composed by Śrī Bhaṭṭi: Edited with the Commentary of Mallinātha and with Critical and Explanatory Notes*. Bombay Sanskrit Series 56–57. 2 vols. Bombay: Government Central Book Depôt.

1909 *The Pratāparudrayaśobhūṣaṇa of Vidyānātha with the Commentary, Ratnāpaṇa, of Kumārasvāmin, Son of Mallinātha, and with a Critical Notice of Manuscripts, Introduction, Critical and Explanatory Notes and an Appendix Containing the Kāvyaḷaṅkāra of Bhāmaha*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series 65. Bombay: Government Central Press.

UV: D. T. Tatacharya Siromani's *Udyānavṛtti*. See Siromani 1934.

Mallinātha on the Correct Formation of Words (*sauśabdya*)

Yuto Kawamura

This paper deals with the question of what the poetic merit (*guṇa*) called *sauśabdya* (*suśabda* + *Ṣyañ*) is. The commentator Mallinātha recognizes this poetic merit in the grammatical sections of Bhaṭṭi's Bhaṭṭikāvya. Commenting on BhK 14.1, Mallinātha quotes Vidyānātha's definition of *sauśabdya* (Pratāparudrayaśobhūṣaṇa [328.2]): *supām tinām ca vyutpattiḥ sauśabdyam parikīrtiyate* ('The derivation of items that terminate in nominal or verbal endings is called *sauśabdya*.'). However, it is difficult to form a clear picture of what *sauśabdya* consists in merely from this definition. For, if *sauśabdya* is obtained by the mere use of nominal or verbal forms that are correctly derived, then it will apply to all Sanskrit works indiscriminately.

Śiśupālavadha 1.51 provides a clue in grasping the concept of *sauśabdya*. The verse runs as follows:

ŚV 1.51: *purīm* ⁽¹⁾*avaskanda* ⁽²⁾*lunīhi nandanam*
⁽³⁾*muṣāṇa ratnāni* ⁽⁴⁾*harāmarāṅganāḥ* |
vīgrhya ⁽⁵⁾*cakre namucidviṣā vaśī*
ya ittham asvāsthyam ahardivam divaḥ ||

The ruler (Rāvaṇa), competing with the enemy of Namuci (i.e., Indra), attacked his city (*Amarāvati*), destroyed the Nandana garden, looted [the city's] treasures, and abducted the celestial nymphs. In this manner, [Rāvaṇa] ravaged (*cakre* . . . *asvāsthyam*) heaven day after day.

Note that Mallinātha accepts two kinds of *sauśabdya*: one which involves the derivation of items that terminate in nominal endings (*sauśabdya* 1) and the other which involves the derivation of items that terminate in verbal endings (*sauśabdya* 2). He acknowledges *sauśabdya* 2 in ŚV 1.51 on the basis of the manifoldness of verb forms (*tiṅvaicitryāt*) observed there and cites a definition of *sauśabdya* (source unknown): *supām tinām parāvṛttiḥ sauśabdādam* ('*sauśabda* [=*sauśabdya*] [consists in] changes of items that terminate in nominal or verbal endings.'). In this connection let us note the following points: Verb forms (1)–(4) are accounted for by A 3.4.3: *samuccaye 'nyatarasyām*, which provides that the I-OT optionally follows verbs if there is the accumulation (*samuccaya*) of actions denoted by them, and that I-OT introduced after the verbs is replaced by *hi* (zero substitutes for *hi* after the vowel *a* [A 6.4.105: *ato heḥ*]); the use of verb form (5) is accounted for by A 3.4.5: *samuccaye sāmānyavacanasya* providing for the additional use (*anuprayoga*) of a verb that denotes an action common to accumulated actions (*samuccīyamānakriyā*). All this shows that *sauśabdya* 2 is obtained when a series of verb forms that are correctly derived according to grammatical rules is used in a single verse of *kāvya*. This naturally implies the condition on which *sauśabdya* 1 is obtained. Vidyānātha's example (*udāharaṇa*) of *sauśabdya* can be interpreted as showing *sauśabdya* 1.

As is well known, the main purpose of the Bhaṭṭikāvya is to present illustrations of Pāṇini's rules (*pāṇinīyasūtrāṅgām udāharaṇam kāvyam*). This work can be said to be a treasury of *sauśabdya* 1–2. They, as poetic merits, add charm to the work (*kāvyaśobhākara*). Mallinātha makes the point that, of the three grammatical sections of the Bhaṭṭikāvya, *prakīrṇakāṇḍa* (on miscellaneous rules) and *adhikāraṅkāṇḍa* (on rules governed by headings) have *sauśabdya* 1, and *tiṅantakāṇḍa* (on finite verb forms) has *sauśabdya* 2. It is evident that Mallinātha considers *sauśabdya* as what characterizes the sections. All these things make it clear that he found poetic value in the multifarious usages (*prayogavaicitrī*) shown in the grammatical sections, which reflect the author's extensive knowledge of Pāṇinian grammar.